

韋應物「驪山行」詩考

—

中唐の詩人である韋應物は、開元年間に生まれ青春期を玄宗の側で過ごした人物として知られる⁽¹⁾。安録山が反旗を翻し玄宗が崩御するに及んで、後ろ盾を失った彼の生き方は否應なく變更を迫られた。すなわち、輝かしく榮光からの轉落であり、蹉跎多き道を歩まねばならなくなったのである。彼はこれを契機として讀書に勵み詩作を始めたことが知られている。

このように、時代の巨大な轉換が何れの詩人に對して何かしらの作用を及ぼさぬはずはない。とりわけ、安史の亂によつて「詩人」韋應物が誕生したことを踏まえるならば、この事件が彼の文學に相當の影響を與えていたはずであろう。だが、

土 谷 彰 男

作品を観察すると、叛亂に向かい批判の眼光を鋭くさせた杜甫などとは異なり、韋應物は玄宗とその榮光の時代の消失に向かつて追想の言葉を盡くすことになる。

韋應物が安史の亂の戰禍をほとんど描かなかつたことについては、彼が高級官僚の家系を出自に持つこと、また玄宗に近侍した經歷を持つことにその理由が求められてきた。その結果、韋應物にとっては、安史の亂よりも玄宗の蒙塵・崩御により深い意味があつたと見なされている。しかしながら、そのことが韋應物その人の作品に即して十分に理解されてきたとは言い難い。すなわち、玄宗消失は實は彼自身において多面的に捉えられているものであつて、そういった作品こそが韋應物の文學を形成しているのである。本稿が驪山行を取り上げて論ずるのは、こうした從來の議論の不足を補うため

である。

玄宗は一時の繁榮を築き、韋應物はその榮譽に浴した。玄宗遊幸とそれに隨行した體驗は往時を回想する緣であり、それは必然、玄宗の消失を否應なく彼の腦裡に浮かび上がらせることになる。本稿では、彼が玄宗消失を述べるにあたってこのような個別的な體驗を作品中に如何に示し、またそこから玄宗という時代を如何に普遍化しえたのかということについて考えたい。その際、玄宗遊幸に從つた體驗にもとづく「驪山行」詩を中心に採り上げ、その描寫に着目して論じていく。⁽²⁾

二

韋應物の傳記研究において、玄宗の華清宮遊幸に付き從つた様を描く作品群は、この人物の考證に資するところが大きい。すなわち、年譜考證の一次資料となる北宋王欽臣の序に「天寶中遊幸に扈從す、疑うらくは三衛たり」とあり、この記述が次に掲げる作によって裏付けうるからである。

- 「燕李錄事」(卷一、雜擬)
- 「酬鄭薩曹驪山感懷」(卷五、酬答)

○「逢楊開府」(卷五、逢遇)

○「溫泉行」(卷九、歌行)

○「驪山行」(卷十、歌行)

これらの詩篇の間には、その描寫において特徴的な事項が確認しうる。すなわち、玄宗遊幸を描くのみならず、その後、に續く安史の亂を併せて描くことにより、この兩者が不可分一體のものとして語られているということである。

花開漢苑經過處 花は漢苑に開く 經過の處
 雪下驪山沐浴時 雪は驪山に下る 沐浴の時
 近臣零落今猶在 近臣零落し 今猶お在り
 仙駕飄飄不可期 仙駕飄飄として期すべからず

〔燕李錄事〕

驪山風雪夜 驪山 風雪の夜
 長楊羽獵時 長楊 羽獵の時

武皇升仙去 武皇 仙に升りて去る
 憔悴被人欺 憔悴たり 人に欺どらる

〔逢楊開府〕

北風慘慘投溫泉 北風慘慘として 溫泉に投ず

： 忽憶先皇遊幸年 忽として憶ゆ 先皇遊幸の年

一朝鑄鼎降龍馭 一朝鼎を鑄て 龍馭降り

小臣髯絶不得去 小臣髯絶えて 去るを得ず

〔溫泉行〕

干戈一起文武乖 干戈一たび起りて 文武乖き

歡娛已極人事變 歡娛已に極りて 人事變ず

〔驪山行〕

ただ、より正確に述べるならば、これらの作のほとんどが、戦亂そのものには言及しない。「仙駕飄飄として期すべからず」、あるいは「武皇升仙して去る」とあるように、むしろ、直接には玄宗崩御（七六二年）を言うに及んで、皇帝權力の絶大なる後ろ盾を失ったことによる惘然たる悲哀が明らかにされているのである。奇しくも崩御の年は安史の亂が平定されたそれと同じであり、それは韋應物にとって往時の榮華を

韋應物「驪山行」詩考（土谷）

思い起こさずにはいられぬものだった。言い換えれば、韋應物におけるこの戦亂は、彼にとってより本質的な問題となる玄宗崩御に至るまでの経過點にしか過ぎぬように見えるのである。

そこで注目されるべきは、驪山行である。玄宗消失を言うに變わりは見られぬが、その詩には「干戈一起」と述べて安録山の擧兵をとくに明示する。また華清宮の描寫に委細を盡すなど、そのほかの詩とは一線を畫す。これと同様の歌行體詩でありかつ華清宮を描く溫泉行と比べても、明らかな違いが見られる。

もともと、この驪山行と溫泉行については、玄宗遊幸を内容とすること、またいずれも歌行體詩の詩型によることから、これまでこの兩者はほとんど區別なく見られてきた。ただ、その描寫について仔細に検討してみると、兩者には本質的に相違する部分が見られるのである。

三

この驪山行・溫泉行については、すでにいくつかの先行研究がある³⁾。そのうち制作年代については、竹村則行「韋應物の『驪山行』『溫泉行』詩について」に考察がなされてい

る。それによると、驪山行は代宗の廣徳元年（七六三）頃、韋應物二十七歳のとき洛陽丞赴任のため長安から洛陽へむかう途上、驪山の温泉に投宿した際の作とする。また温泉行は、同じく代宗の大暦二年（七六七）、頃、三十一歳のとき、こんどは洛陽から長安にもどる際のものとする。

ここで、華清宮について觸れねばなるまい。⁽⁴⁾ 華清宮は長安の東、現在の西安臨潼縣の南に位置する驪山の北麓にあった離宮の名である。もともとこの地には泉質の優れた温泉が湧いたことから、秦始皇帝のころより「驪山湯」として開かれ皇帝が遊幸するところとなった。唐太宗のころから「湯泉宮」や「温泉宮」として知られ、また玄宗のころには毎年冬十月の行幸の地となった。玄宗は開元十一年（七二三）よりおよそ三十回に亘ってここを訪れたことが知られる。「華清宮」の名は楊貴妃の歡心を買うため天寶六載（七四七）に命名されたもので、その湯井は「華清池」と呼ばれる。楊貴妃と同じく玄宗の寵愛を受けた安録山も浴を賜ったといふ。⁽⁶⁾ 華清宮はまた、驪山の名を取って「驪山宮」や「驪宮」とも呼ばれる。またこのあたりは古くから新豊と呼ばれており、天寶七載（七四八）には昭應と名を改めた。⁽⁷⁾ 唐詩では「新豊」、あるいは「昭應」の語をもってこの離宮への連想を含むもの

となる。⁽⁸⁾ 韋應物は天寶一〇載（七五一）十五歳のときに玄宗の宿衛となり、これ以降安録山擧兵によって宮殿が閉ざされるまでの間、玄宗の華清宮遊幸に付き従った。

本稿では驪山行の検討を中心として進めるが、まず比較検討の對照として温泉行をとりあげて見ていきたい。

1 出身天寶今年幾

頑鈍如鈍命如紙

身を天寶より出だし今年幾ぞ
頑鈍たること鈍の如くにして命紙の如し

作官不了卻來歸

還是杜陵一男子

官と作るも了らず 却て來たり歸る

5 北風慘慘投溫泉

忽憶先皇遊幸年

還た是れ杜陵 一男子
北風慘慘として 温泉に投ず

身騎厖馬引天仗

直入華清列御前

忽として憶ゆ 先皇遊幸の年
身は厖馬に騎りて天仗を引き
直ちに華清に入り 御前に列す

9 玉林瑤雪滿寒山

上昇玄閣遊絳煙

玉林 瑤雪 寒山に滿ち

平明羽衛朝萬國

玄閣に上り昇りて 絳烟遊ぶ

車馬合沓溢四塵

平明 羽衛 萬國に朝し

13 蒙恩每浴華池水

車馬 合沓 四塵に溢る

恩を蒙りて毎に華池の水に浴し

皇獵不蹂渭北田　獵に扈いて渭北の田を蹂ます
 朝廷無事共歡燕　朝廷　事無く　共に歡燕し
 美人絲管從九天』　美人　絲管　九天従りす
 17一朝鑄鼎降龍馭　一朝　鼎を鑄て　龍馭を降ろし
 小臣髣絕不得去　小臣　髣絶えて　去るを得ず
 今來蕭瑟萬井空　今來蕭瑟として　萬井空し
 唯見蒼山起煙霧　唯見る蒼山　煙霧　起こるを
 21可憐俄掬失風波　可憐む可し　俄掬として　風波に失す
 仰天大叫無奈何　天を仰ぎて大いに叫ぶも　奈何とも
 　　　　　　　　　　する無し
 弊裘羸馬凍欲死　弊裘　羸馬　凍えて死せんと欲する
 賴遇主人杯酒多　賴きわいに主人の杯酒の多きに遇う

詩にはおのれの出自を述べる箇所がいくつか見られる。いわく「出身天寶」（第一句）、いわく「杜陵一男子」（第四句）と。しかし無能なるゆえ身を誤り下級官吏となつて東奔西走する。そのような折、驪山のふもとを過ぎり玄宗遊幸のことを回憶した。以下、驪山華清宮の描寫に詩幅が割かれる（第七—一八句）。これについては後述する。玄宗が崩御すると宮

殿は寂れ、おのれの人生も風波にもまれることとなった（第一七—三二句）。嘆きは叫びとなるものの、如何ともしがたい。唯一主人から勧められた酒だけが慰めである（第三三・三四句）。

全體に詠嘆の氣味を帯びており、懷舊、あるいは詠懷に屬するものであつて、一人稱による語りが全編を貫く。ここで玄宗遊幸の描寫はおのれの體驗の一部として述懐され、その表現は往時の榮華をかくも懐かしげに際立たせ、それはそのまま韋應物の現在の落ちぶれたさまをまざまざと映し出すことになるのである。

試みに、これを「燕李錄事」詩と比べてみる。すると、この兩者には共通する點が多い。

與君十五侍皇稠	君と十五にして	皇稠に侍り
曉拂爐煙上赤櫳	曉拂爐煙	赤櫳に上る
花開漢苑經過處	花は漢苑に開く	經過の處
雪下驪山沐浴時	雪は驪山に下る	沐浴の時
近臣零落今猶在	近臣　零落するも	今猶お在り
仙駕飄飄不可期	仙駕　飄飄として	期すべからず
此日相逢思舊日	此の日相い逢うて	舊日を思ふ

中國詩文論叢 第二十五集

一杯成喜亦成悲 一杯喜びと成り 亦た悲しみと成る

一人稱の語りによって、かつて玄宗の側に仕え華清宮遊幸に從つたこと、玄宗崩御により後ろ盾を失い現在に零落の身となったことを順に述べる。いってみれば、この作は溫泉行から華清宮描寫の部分をつくり省いたものとして見ることができよう。それでもなお詩意が大きく損なわれることがないのは、この作も溫泉行と同様、懷舊詠懷に屬するものだからである。つきつめれば、この述懷を主題とする作品において、玄宗遊幸の具體的な描寫は、言及されるか、あるいは言及されぬかというほどのものと見てよい。念を押して言えば、この兩者は懷舊詠懷のもとに詩意が完結しているのである。

一方、驪山行を見てみると、詩幅のほとんどが玄宗遊行と華清宮の描寫に割かれており、ここにこの作品の核心があることが了解される。いま、その全體を確認すべくその描寫に沿って見ていく。

冒頭は、開元の世がよく治まり、玄宗が華清池に行幸したことを述べる。老子（聖祖）が降臨し百の瑞祥が集まるなど、華清池が玄宗の行幸を迎えるに適した場として描かれる。

1 君不見開元至化垂衣裳 君見ずや開元至化にして衣裳を

垂れ

厭坐明堂朝萬方 明堂に坐して萬方に朝するに厭く

訪道靈山降聖祖 道を靈山に訪うに 聖祖降り

沐浴華池集百祥 華池に沐浴するに 百祥集まる

次に、隨行する儀仗の威容が描かれる。周圍の靜寂さと對比される。

5 千乘萬騎被原野 千乘萬騎 原野を被い

雲霞草木相輝光 雲霞草木 相い輝き光る

禁仗圍山曉霜切 禁仗山を圍みて 曉霜切し

離宮積翠夜漏長 離宮翠を積みて 夜漏長し

次に、朝政が平穩無事であることを述べる。

9 玉階寂歷朝無事 玉階寂歷として 朝に事無し

碧樹萎洵寒更芳 碧樹萎洵として 寒に更に芳し

三清小鳥傳仙語 三清小鳥 仙語を傳え

九華真人奉瓊漿 九華真人 瓊漿を奉る

次に、下元節での朝禮のことを述べる。

13 下元味爽漏恆秩 下元の味爽 漏 恆秩たり

登山朝禮玄元室 山に登り禮に朝す 玄元室

翠華稍隱天半雲 翠華 稍や隱る 天半の雲

丹閣光明海中日 丹閣 光明す 海中日

羽旗旄節憩瑤臺 羽旗旄節 瑤臺に憩い

清絲妙管從空來 清絲妙管 空從り來る

次に、驪山登高の様子を描く。

19 萬井九衢皆仰望 萬井九衢 皆仰望し

彩雲白鶴方徘徊 彩雲白鶴 方に徘徊す

憑高覽古嗟寰宇 高きに憑りて古を覽じ 寰宇を嗟く

造化茫茫思悠悠 造化茫茫として 思い悠なるかな

秦川八水長繚繞 秦川八水 長く繚繞たり

漢氏五陵空崔嵬 漢氏五陵 空しく崔嵬たり

次に、皇帝の御世を壽ぐ。

25 乃言聖祖奉丹經 乃ち言う 聖祖 丹經を奉じ

以年爲日億萬齡 年を以て日と爲す 億萬齡

蒼生咸壽陰陽泰 蒼生咸な陰陽の泰らかなるを壽ぎ

高謝前王出塵外 高く前王の塵外に出づるを謝す

次に、皇帝のもとに有能な臣下が集まり四方が繁榮していることを述べる。

29 英豪共理天下晏 英豪は共に理りて 天下晏らかたり

戎夷讐伏兵無戰 戎夷は讐れ伏して 兵戰う無し

時豐賦斂未告勞 時豊にして賦斂め 未だ勞を告げず

海闊珍奇亦來獻 海闊くして 珍奇 亦た來りて獻す

次に、安史の亂の勃發と玄宗の崩御により華清宮が閉ざされたことを描く。

33 干戈一起文武乖 干戈一たび起りて 文武乖き

歡娛已極人事變 歡娛已に極りて 人事變ず

中國詩文論叢 第二十五集

聖皇弓劍墜幽泉 聖皇弓劍 幽泉に墜ち

古木蒼山閉宮殿 古木蒼山 宮殿閉す

最後に、華清宮行幸の復興を願うことを述べる。

37 艫承鴻業聖明君 鴻業を艫承す 聖明の君

威震六合驅妖氛 威は六合に震い 妖氛驅る

太平遊幸今可待 太平の遊幸 今待つべし

湯泉嵐嶺還氣覽 湯泉 嵐嶺 還た氣覽たり

華清宮遊幸の描寫表現を中心として、以上の要素に分けた。

これらについては後述する。ここで確認すべきは、玄宗遊幸の描寫の部分（第一—三二句）はこの詩の本體であり、これを省いてしまえば、作品そのものの存在が失われてしまうことである。加えて、玄宗遊幸の描かれ方について温泉行と比較すれば、描かれる要素の多寡、および描寫そのものの幅の違いが歴然としてあり、韋應物はこの詩において玄宗遊幸を委細を盡くして述べていることが確認しえよう。このように、驪山遊幸を詩に假構し再現することによって、文學において玄宗の榮華を復元する、これがこの詩の主題であると見てよい。

いったい玄宗遊幸の描寫は、温泉行においてはおのれの懐舊の情を強く浮かび上がらせるためのものであった。すなわち、その描寫に意を盡くすほど、懐舊の情もまたその輪郭を濃くする。往時の歡樂がそのまま現在の落ちぶれた様を際立たせるのである。一方、それを念頭に置いて驪山行を見たとき、そこに懐舊の情を認めることは難しい。これは玄宗遊幸という同一の題材を扱いながらも、その表現しようとする方向がまったく異なることによると考えられる。

この作の表現意圖はそもそも、最後の要素に見える通り、今上皇帝に建議するものであって、それはほかでもなく驪山遊幸の復興を主張するということであった。驪山遊幸の復興——言い換えれば繁榮の再現に玄宗の榮華を見出すという點では、この詩も温泉行も同一の基盤に立つ。しかし、温泉行はそれを失われたものとして詠じ、驪山行は繁華の復興が可能なものとして主張する點で、表現意圖は全く方向を異にするのである。

兩者の相違を、作品の具體的な表現——描寫の完結性・作者の個人的視點の濃淡——に即して確認したい。温泉行は懐舊のうちに天子遊幸を描き、その描寫において皇帝を対象化する。ゆえに、その表現は韋應物と玄宗皇帝の關係における

個別的な體驗と感慨に強く結びついており、それを除いてはその描寫のあり方を理解するのは難しい。現に「燕李錄事」詩に見られたように、華清宮遊幸の部分が省かれていたことを想起されたい。

その一方で、驪山行には遊幸の様がまざまざと描かれており、それに續く玄宗の消失と華清宮の零落といった一連の流れは、個人的な體驗を述べることは次元を異にする、言ってみれば普遍的な高みにある超越的な第三者の視點に依據した描寫として諒解しうる。これにより、華清宮の榮枯盛衰、そこから生じる悲哀、またそれが玄宗という時代の輪郭を端的に映し出すものであることを讀者は感得しうるのである。このように見てみると、この驪山行において、ここに華清宮を舞臺とした一時代の盛衰が物語られるようになったと認められるのである。

四

以上のことを踏まえ、さらにこの兩者の制作時期について検討してみたい。傳記考證の觀點から先にも述べたように、驪山行は廣徳元年（七六三）頃の作、溫泉行は大曆二年（七六七）の作というのがほぼ定説¹⁰となっている。これは、韋應

韋應物「驪山行」詩考（土谷）

物が廣徳―大曆初期ごろ洛陽丞を務めた前後の時期に相當する。すなわち、溫泉行には「官と作るも了らず却て來たり歸る」（第三句）とあり、任を辭して長安に戻った時期と特定されることによる。その一方で、驪山行は「鴻業を膾承す聖明の君」（第三七句）とあり、この「聖明君」が代宗皇帝のことを指すとして、少なくとも溫泉行の作られた大曆初期よりは下らないと推定されている。だが、この一句のみを根據に、驪山行を代宗即位の當初の作と論斷することは難しい。あるいは、大曆中期の唐朝の安定回復、また宮廷文壇の活躍（大曆十才子の活躍）を踏まえての制作と考えられる余地もある。廣徳元年は、安史の亂が平定された年でもあるが、同年十月には吐蕃の侵攻により長安は陥落し代宗は陝州に蒙塵したことが示すように、唐朝はまだ安定しておらず、華清宮への遊幸が可能な状態では全くなかった。

そうすると、描寫の完結性や普遍性といった様式論の方向から考えることも肝要となろう。すでに述べたように、溫泉行は詠懷の様式に屬するものであり、その描寫は個人の體驗と感慨にもとづいた素朴なものであった。一方、驪山行はそれとは異なり、個人の體驗を超越した第三者的な視點から玄宗遊幸を描き天子行幸の再興を願うものである。兩者のこの

ような相違をまず確認することが、第一義的な意味を持つ。そのうえで、温泉行の場合その描寫は韋應物の感懷とは切り離しえぬものであり、極めて具體性を有するものであった。

その一方、驪山行の場合、すでに見てきたように、その描寫は時代の盛衰を物語る地點に結實し、その描寫の完結性・視點の普遍性は温泉行のそれよりも高いことが認められた。イメージの生成過程における具體から抽象に至る流れを想定すれば、少なくとも様式論的觀點では驪山行の制作時期は温泉行のそれよりも先んずるものではないと考えることが可能である。何よりも重要なことは、この両者が異なる様式を持ち、異なる主題を持つことを正確に理解することである。

そもそも華清宮は、玄宗の榮華を刻印するあまたの事物——大明宮、興慶宮、曲江池等——のひとつにしか過ぎぬはずであった。しかし、玄宗消失後は、華清宮こそが往時の榮華を物語り時代の盛衰を象徴する存在へと變質する。それはひとつに玄宗という時代が歴史の透過を受けたということもあるが、より重要なことは、華清宮に對してひとつのイメージが形成賦與された過程にある。いわば華清池は、玄宗の榮光を一身に體現する象徴的事物へと昇華を遂げるのである。温泉行の具體から驪山行の抽象へと至る過程が正しくそれで

あり、それがひとり韋應物という人物によって成し遂げられたことは注意されてよい。

五

驪山行に描かれる玄宗遊幸の様については、すでにその描寫に沿っていくつかの要素に分けた。以下にその詳細を検討するにあたり、ここではまず、さきに見た温泉行と同じく驪山遊幸のことを描いた「酬鄭薩曹驪山感懷」詩を検討する。

1 蒼山何鬱盤 蒼山 何ぞ鬱盤たる

飛閣凌上清 飛閣 上清を凌ぐ

先帝昔好道 先帝 昔道を好み

下元朝百靈 下元 百靈に朝す

5 白雲已蕭條 白雲は已に蕭條たり

麋鹿但縱橫 麋鹿は但だ縱横す

泉水今尚暖 泉水 今尚お暖かにして

舊林亦青青 舊林も亦た青青たり

9 我念綺襦幘 我念う 綺襦の幘

扈從當太平 扈從するに太平に當る

小臣職前驅 小臣 前驅を職し

馳道出絮亭 馳道 絮亭より出づ

13 翻翻日月旗 翻翻たり 日月の旗

殷殷樹鼓聲 殷殷たり 樹鼓の聲

萬馬自騰驤 萬馬 自ら騰驤し

八駿按轡行 八駿 轡を按じて行く

17 日出煙舂綠 日は出でて 舂綠に煙り

氛覽麗層薨 氣は覽みんにして 層薨麗たり

登臨起遐想 登臨 遐想を起し

沐浴權聖情 沐浴 聖情を權まばしむ

21 朝燕詠無事 朝燕 無事を詠じ

時豐賀國禎 時豐 國禎を賀す

日和弦管音 日は和す 弦管の音

下使萬室聽 下は萬室をして聽かしむ

25 海坪湊朝貢 海坪 朝貢を湊め

賢愚共歡榮 賢愚 共に歡榮たり

合沓車馬喧 合沓 車馬喧しくして

西聞長安城 西のかた長安城に聞ゆ

29 事往世如寄 事往きて 世寄するが如し

感深跡所經 感深くして 跡經し所なり

申章報蘭藻 章を申べて 蘭藻を報じ

韋應物「驪山行」詩考（土谷）

一望雙涕零 一たび望みて 雙涕零る

詩題に「感懷」とあることから明らかなように、この作は懷舊詠懷に屬し、全篇一人稱の語りによって往時を回想し現在の不遇を詠嘆する。この點からすれば、溫泉行と等しい。また、驪山遊幸の描寫についても溫泉行と共通する部分が多い。事實、兩者は明白な回憶のなかに遊幸の様がその描寫の對象としてひとつひとつ展開する（第九—一八句）。すなわち、隨行の列に加わったこと（第九—十二）、儀仗の威容（第十三—十六）、華清宮の規模（第十七—一八句）、沐浴の恩寵に預かったこと（第十九・二〇句）、および朝政無事と四方繁榮（第二一—二八句）がそれである。先に述べたように、それらは描寫のうちに皇帝が對象化されているのであり、それゆえ感懷の情もその輪郭の濃淡を明らかにするのであった。このことは溫泉行においても同様であり、兩者が五言と七言といった詩型の相違にも関わらず主題が共通するものとして感じられるのは、これによる。

一方、驪山行は先の二者とは大きく異なるところがある。すなわち、結論から述べると、この驪山行の描寫のあり方は、初盛唐の應制詩のそれと極めて近似しているということが認め

められるのである。

この驪山行から遊幸の部分に相當する各々の要素を見てみると、さらに次のように大きくまとめられる。すなわち、華清宮遊幸の描寫、驪山登高の描寫、および皇帝祝贊の描寫である。このうち、皇帝祝贊は應制詩においては必須條件であり、言ってみれば常套的な表現として頻出するものである。

つまるところ、應制詩そのものの存在意義を保證する所以がそれにあると言つてよい。試みに、盛唐期の宮廷詩人である王維の作に限つても、皇帝祝贊、すなわち萬歳の御世を言祝ぐそれは、「三月三日曲江侍宴應制」詩（『全唐詩』卷一二四）に「今従り億萬禎、天寶春秋を紀す」と見え、また「三月三日勤政樓侍宴應制」詩に「天は無爲の徳を保ち、人は不戰の功を歡ぶ」（『全唐詩』卷一二七）と見える通りである。ところが、このような常套表現こそが驪山行の獨自性を決定しているのである。

そこで翻つて驪山行を見てみる。すると、華清宮遊幸、つづいて驪山登高の描寫がそれぞれ展開され、そこから、「乃ち言う聖祖丹經を奉じ、年を以て日と爲す億萬齡。蒼生成な陰陽の泰らかなるを壽ぎ、高く前王の塵外に出づるを謝す」（第二五―二八句）、また「英豪は共に理りて天下晏らかたり、

戎夷は讐れ伏して兵戦う無し。時豊にして賦斂め未だ勞を告げず、海闊くして珍奇亦た來りて獻ず」（第二九―三二句）と、皇帝祝贊の言辭が導かれていることが確認しうる。このように、遊幸・登高から祝贊へという流れが、驪山行に見える描寫の特徴であり、この詩の獨自性を浮き彫りにしているのである。これまでの應制詩には華清宮遊幸や驪山登高が描かれることは少なくはなく、この點もまた、驪山行が應制詩の血統を繼ぐものであることを示していよう。

それでは、應制詩には華清宮遊幸や驪山登高が如何に描かれていたのか。驪山行との關わりにおいて、次にそれぞれを見ていく。

華清宮遊幸については、その作例が比較的よくまとまっているもの¹⁾のうち、ここでは初唐中宗皇帝の遊幸の作を挙げらる。景龍三年（七二〇）十二月、中宗は溫泉宮（のちの華清宮）に行幸し詩を賦した²⁾。それに和した「奉和幸新豐梁泉宮應制」詩が徐彥伯（卷七六）、武平一（卷一〇二）、上官昭容（卷五）らに見える。このうち、武平一のものを見てみる。

1 秦王登碣石 秦王 碣石に登り

周后襲崑崙 周后 崑崙に襲ぐ

何必在遐遠 何ぞ必らずしも遐遠に在らんや

方稱萬宇尊 方に萬宇の尊きを稱う

5 我皇順時豫 我皇 時豫に順い

星駕動軒轅 星駕 軒轅に動く

雄戟交馳道 雄戟 馳道に交わり

清笳度國門 清笳 國門を度る

9 回輿長樂觀 輿を回らす 長樂觀

校獵上林園 獵を校す 上林園

行漏移三象 行漏 三象を移し

連營總八屯 連營 八屯を總る

13 旌搖鸚鵡谷 旌は搖る 鸚鵡谷

騎轉鳳皇原 騎は轉る 鳳皇原

蒸壁蒼苔古 蒸壁 蒼苔 古くして

靈泉碧溜梁 靈泉 碧溜 梁かなり

17 參差開水殿 參差として 水殿を開き

窈窕敞巖軒 窈窕として 巖軒を敞く

豐邑模猶在 豐邑 模は猶お在り

驪宮跡尚存 驪宮 跡は尚お存す

21 煙松銜翠幄 煙松 翠幄を銜み

雪徑遶花源 雪徑 花源を遶る

侍從推玄草 侍從 玄草を推し

文章召虎賁 文章 虎賁を召す

25 深仁浹夷夏 深仁 夷夏に浹く

洪造溢乾坤 洪造 乾坤に溢つ

謬忝王枚列 謬りて王枚の列を忝くし

多慚雨露恩 多く雨露の恩を慚す

冒頭四句は登高遠望の感慨を描く。これについては、このあと驪山登高のところ述べる。つづいて、今度の遊幸が時宜にかなうことを述べた（第五句）あと、溫泉宮に至るまでの途上の様を描く（第六―八句）。「星駕」は夜を衝いて天使の御輿が駆けること。「雄戟」はここでは儀仗の旗指物と見てよいだろう。また、「鸚鵡谷」「鳳皇原」（第十三・十四句）はそれぞれ驪山のあたりに位置する土地であって、このあたりに行宮を設営していたことが分かる。このように行宮を取り圍む儀仗の威容を描くところは、驪山行にも見えるものであった。つづいて溫泉宮が開かれたさまを述べた（第一七―二〇句）あと、「深仁夷夏に浹く、洪造乾坤に溢つ」と述べる（第二五・二六句）。天子の仁徳が遍く行き渡り、恩恵が天地に満ちていると稱えるのである。明らかに溫泉宮への天子

遊幸が皇帝祝贊と結びつく部分として確認しうるのである。

驪山登高については、同じく景龍三年十二月中宗が驪山に登り「登驪山高頂寓目」詩（『全唐詩』卷二）を賦すと、「奉和登驪山高頂寓目應制」の名のもと、崔湜（卷五四）、李奔（卷五八）、閻朝隱¹⁴（卷六九）、劉憲（卷七一）、蘇頌（卷七三）、張說¹⁵（卷八七）、李乂（卷九二）、武平一（卷一〇二）、趙彥昭（卷一〇三）がそれぞれ詩を和した。¹⁶このうち、登高遠望の描寫から驪山行と共通するものとして、中宗のものを挙げる。

四郊秦漢國 四郊 秦漢の國
 八水帝王都 八水 帝王の都
 稽闔雄里閉 稽闔 里閉に雄にして
 城闕壯規模 城闕 規模に壯たり
 貫渭稱天邑 渭（渭水）を貫きて 天邑に稱い
 含岐實輿區 岐（岐山）を含みて 輿區を實らす
 金門披玉館 金門 玉館を披き
 因此識皇圖 此に因りて 皇圖を識る

驪山行では、「萬井九衢皆仰望し」（第一九句）と述べて空間的な擴張から、「高きに憑りて古を覽じ寰宇を嗟く」（第二

一句）と古の世に延びる時間的な伸延をトレースして描くことによって、「秦川八水」「漢氏五陵」（第三・二四句）といった囑目の風景を歴史の流れのなかに置いて眺める。中宗のこの作も、冒頭四句にみられるように、遠望のさまを秦漢時代の帝都に擬してその壯雄のさまを描く。登高遠望が悠久なるもの呼び起こすものとして、このふたつは共通するのである。中宗の作に和した劉憲は「驪阜皇都を鎮め、鑾遊八區を眺む」と詠い、また趙彥昭は「皇情九垓に遍くして、御輦重回に駐む」と詠い、ここにあらためて廣大にして悠久なる版圖の規模を確かめ、天子の恩情を禮贊する。驪山登高から祝贊に繋がる流れが、またここからも確認しうるのである。

六

驪山行にみえる描寫の構成が應制詩のそれと極めて近似することを、以上のように確認した。付言するならば、驪山行の皇帝祝贊は、この詩の全篇からみれば、本来の制作意圖である天子遊幸の復興の主張をかつての玄宗遊幸の描寫によって補強する以上のものではない。しかし、その點を考慮に入れても、皇帝の榮光を禮贊するその手法において、この詩がかつての應制詩の血統を繼ぐものであることは重要な意味を

持つ。

それでは、韋應物はなぜ玄宗行幸を委細を盡くしてまで描寫しなければならなかったのか。それを考える手がかりは、この詩が做うところの應制詩のなかにある。

應制詩はそもそも、皇帝禮贊にその存在理由があることはすでに述べた。皇帝の作り上げた、華麗に装われた世界——庭苑、宴席、儀式——の見事さを嘆賞する文學が應制詩である。皇帝は、みずから作り上げた世界の見事さを自畫自贊することができない。ゆえに、おのれには不可能であることを、詞臣に命じて代辨させるのが應制詩なのである。このように、應制詩は皇帝登臨の正當性を最大限の贊辭をもって文學の側から保證する機能を持つものであると言つてよい。

皇帝は權力の頂點にあつて榮光の世界の中心に位置し、應制詩の作者たちはその榮光を禮贊するという行爲を通じて皇帝に接近する。作詩の現場にて繰り返される應制、あるいは奉和聖制（天子御製に奉和する）といった行爲は正しくこのような所爲なのであり、これによって彼らは皇帝の榮光と一體化を遂げるのである。おびただしい數にのぼる應制詩の本質は、この皇帝との一體化という一點に歸趨すると言つてもよい。

驪山行において玄宗遊幸の描寫が應制詩のそれと近似する

理由がここで諒解しうる。すわなち、韋應物はみずからが玄宗皇帝と一體であるという願望を、その玄宗の榮光、すわなち、それを象徴する華清宮の榮華の描寫によって明らかにしたのである。この驪山行を作り、華清宮遊幸や驪山登高のさまを眼前に臨むかのごとく描き、さらに玄宗の御世を言祝ぐといった一連の文學的營爲は、すでに應制という機會を、當の玄宗の消失によって永遠に奪われた彼にとつて、それを代替する殘された唯一の方法なのであつた。

このように見てみると、韋應物における玄宗皇帝との關係性という觀點——出自や經歷といった外的要因によるものはなく——が、溫泉行と驪山行を分けるひとつの基軸となることが明らかとなる。すなわち、これまでにも見てきたように、溫泉行はあくまでも失われた往時を追想し懷舊の情を述べるものであつて、玄宗遊行の描寫のうちに皇帝を自己と切り離して對象化した。一方、驪山行は玄宗遊幸を描寫することによって皇帝と一體化しえることを示した。兩者の相違は正しくここにあると言つてよからう。そして、このような差異の存在によってこそ、韋應物が玄宗消失を如何に捉えていたのか、その様相の違いを端的に浮き彫りにしていると見られるのである。つきつめれば、歴史事實として玄宗はすでに

消失したが、韋應物においてはなおも輝きをもって存在しなくてはならない。このふたつの間の揺れ幅が彼の文學を形成しているのである。

注

- (1) 植木久行『詩人たちの生と死 唐詩人傳叢考』13 韋應物(研文出版、二〇〇五)に、諸説の異同を示して詳細に検討する。
- (2) 韋應物の作については、陶敏・王友勝『韋應物集校注』(上海古籍出版社、一九九八)を底本とし、そのほかの作については、『全唐詩』(中華書局)を底本とした。
- (3) 韋應物の歌行體詩について論じたものとして、深澤一幸『韋應物の歌行』(『中國文學報』第二四冊、京都大學文學部中國語學中國文學研究室、一九七四)、赤井益久「韋應物と白樂天——諷諭詩を中心として——」(『國學院雜誌』第八一卷第五號、一九八〇)、竹村則行「韋應物の『驪山行』『温泉行』詩について」(『文學研究』第八六輯、九州大學文學部、一九八九)がある。また、薛天緯『唐代歌行論』(人民文學出版社、二〇〇六)に驪山行などへの言及がある(第三章 中唐歌行・第一節元結與《篋中集》詩人的歌行)。
- (4) 『漢詩の事典』・植木久行「Ⅲ 名詩のふるさと(詩跡)」(大修館書店、一九九九)に詳しい。
- (5) 唐室にはほかに、長安の西、現在の寶鷄眉縣の東南に位置する「鳳泉湯」があり、玄宗は開元三年(七二五)・一一年(七三二)に行幸した。
- (6) 『安録山事迹』卷上・天寶九載に見える。
- (7) 「昭應」の名については、より正確に述べると、新豊から驪山のふもとに會昌を置き、それを昭應に改めた。『舊唐書』卷三八・地理志・地理一、『資治通鑑』卷二一六・唐紀三二にみえる。
- (8) 例として耿漳「絡次昭應」詩(『全唐詩』卷二六八)に「落日向林路、東風吹麥隴。藤草蔓古渠、牛羊下荒冢。驪宮薩久閉、梁谷泉長湧。爲問全盛時、何人最榮寵」とあり、また、白居易「新豐路逢故人」詩(『全唐詩』卷四三三)に「塵土長路絡、風煙廢宮秋。相逢立馬語、盡日此橋頭。知君不得意、鬱鬱來西遊。惆悵新豐店、何人識馬周」とある。
- (9) 赤井氏は、韋應物の歌行の基本的性格を、敘事的であること、および諷諭的であることのふたつに分け、さらに敘事的な作には「ものがたり性」を具有していると指摘する(二六頁)。
- (10) 温泉行の繫年について、孫望『韋應物詩集繫年校箋』(中華書局、二〇〇二)、羅聯添「韋應物年譜」(阮廷瑜『韋蘇州集校注』國立編譯館(臺灣)、二〇〇〇所收)、および陶敏・王友勝『韋應物集校注』(上海古籍出版社、一九九八)はいずれも、洛陽から長安にもどる時の作(ただし、孫氏はそれ

を大曆七年、羅氏は同二年、陶氏は大曆初」とする。驪山行については、孫氏のみが竹村氏の所論と同じ根拠によって赴任途上の作（ただし廣徳二年）とする。

- (11) 例にあげた中宗より以前には、高宗皇帝「過温湯」詩（『全唐詩』巻二）とそれに和した「奉和聖製過梁湯」詩が、越王貞（同巻六）、楊思玄（同巻四四）、王徳眞（同）、鄭義眞（同）にそれぞれ見える。また、中宗以降には、玄宗皇帝「温泉對雪」詩（同巻三）とそれに和した張説「奉和聖製梁湯對雪應制」詩（同巻八六）があり、また「惟此梁泉是稱愈疾豈予獨受其福思與兆人共之乘暇巡遊乃言其志」詩（同巻三）とそれに和した張説「奉和聖製梁泉言志應制」詩（同巻八七）がある。

- (12) 『唐詩紀事』巻九に見える。また、この間の記事については、賈晉華『唐代集會總集與詩人郡研究』（北京大學出版社、二〇〇一）に詳しい。

- (13) 詩題は「駕幸新豐梁泉宮獻詩三首」。

- (14) 詩題は「奉和登驪山應制」。

- (15) 詩題は「奉和聖製登驪山矚眺應制」。

- (16) 『唐詩紀事』巻九。